

# 変わりゆくイタリアの政党政治

—1992年総選挙を中心に—

村 上 信 一 郎\*

Changing Party Politics in Italy : the General Elections of 1992

Shinichiro MURAKAMI\*

## はじめに

イタリアでは1992年4月5－6日に総選挙が行われ、上院315議席、下院630議席をめぐって選挙戦が戦わされた。例によって、前回の1987年総選挙では急進党から立候補したハンガリー生まれのボルノ女優チッチョリーナ（イローナ・スターレル）ひとりが話題を集めた感があったように、今回の総選挙でもそのチッチョリーナとモアーナ・ポッツィが創設し、売春の合法化を唱える「愛の党（Partito d'amore）」や、ムッソリーニの孫娘でソフィア・ローレンの姪である女優のアレッサンドラ・ムッソリーニが極右政党であるイタリア社会運動（MSI）から立候補したことののみが日本のマスコミの注目を集めた。<sup>(1)</sup> そればかりか戦後最多の54政党、477団体が立候補者名簿を提出したということもあって、この総選挙についても、またしてもイタリア風政治狂想曲といった脚色がほどこされて報道されることになるのかと、ひそかに私は危惧していた。

ところが蓋を開けてみると、今回の選挙結果について日本の報道は、たとえスクandalラスな形であるにせよ、重視すべき話題として取りあげるところか、驚くほど地味で小さな取り扱いしかなかった。<sup>(2)</sup> じっさい1991年2月3日の第20回党大会において、イタリア共産党（PCI）が左翼民主党（PDS）に党名を変更したときのほうが、はるかに大きな扱いを受けていたのである（こういった経緯があったのかは知らないけれど、『週刊プレイボーイ』にまで「イタリア共産党が消えた日」という現地レポートが掲載されていたほどであった）。<sup>(3)</sup>

もっとも、こうした扱いをしたのは日本の報道機関だけではなかった。『ニューヨーク・タイムズ』は、速報といった形での経過報告を一切行わず、選挙結果が確定した4月9日になって初めて特派員報告を掲載したが、それは第8面の小さな記事にしかならなかった。いずれにせよ、今回の総選挙では連立与党が大幅に議席を減らしたことから、イタリアの政局は今後大きな混乱に陥ることになるであろうという内容の、いちじるしく散文的で冷めた報道を行うという点では、

---

\*国際関係学科（Department of International Relations）

日米のマスコミは共通していたのである。<sup>(4)</sup>

その理由は明らかであった。というのも、キリスト教民主党 (DC), 社会党 (PSI), 自由党 (PLI), 社会民主党 (PSDI) からなる連立与党が, 下院において現状 (合計得票率53.6%, 356議席) を維持するどころか, 大きく後退した (48.8%, 331議席) ものの, だからといって, それに代わる具体的な政権構想や政治改革へ展望が, はっきりと打ち出されたわけではなく, ある意味では, 先行きの不透明感だけが増大したにすぎなかったからである (表1を参照)。

それにもかかわらず, 私は, 今回の総選挙には, イタリアにおける政党政治の大規模な地殻変動を暗示する, いくつかの重要な徴候が現れていたと考える。しかも, こうした徴候は, 後で詳しく述べるように, すでに一年以上も前から現れていたものであった。したがって, 今回の総選挙によっても, そうした徴候が, あらためて私たちの目の前で確認されたにすぎないといってもよかったのである。

それでは, 今回の総選挙によって確認されたイタリアにおける政党政治の地殻変動の徴候とは, 一体いかなるものなのであろうか。次に, それを見てみよう。

表1 1992年4月総選挙 政党別得票率・議席数 (下院)

| 投票率              | 1992年 |       |     | 1987年 |     |
|------------------|-------|-------|-----|-------|-----|
|                  | 87.3% |       |     | 88.8% |     |
|                  | %     | 増減    | 議席  | %     | 議席  |
| キリスト教民主党 (DC)    | 29.7  | -4.6  | 206 | 34.3  | 234 |
| 左翼民主党 (PDS)      | 16.1  | -10.5 | 107 |       |     |
| [共産党]            |       |       |     | 26.6  | 177 |
| [プロレタリア民主 (DP)]  |       |       |     | 1.7   | 8   |
| 共産党再建派 (Rifond.) | 5.6   |       | 35  |       |     |
| 社会党 (PSI)        | 13.6  | -0.7  | 92  | 14.3  | 94  |
| イタリア社会運動 (MSI)   | 5.4   | -0.5  | 34  | 5.9   | 35  |
| 共和党 (PRI)        | 4.4   | +0.7  | 27  | 3.7   | 21  |
| 自由党 (PLI)        | 2.8   | +0.7  | 17  | 2.1   | 11  |
| 社会民主党 (PSDI)     | 2.7   | -0.2  | 16  | 2.9   | 17  |
| 北部同盟 (Lega)      | 8.7   | +8.0  | 55  | 0.7   | 1   |
| パンネッラ (Pannella) | 1.2   | -1.4  | 7   | 2.6   | 13  |
| 緑の党 (Verdi)      | 2.8   | +0.3  | 6   | 2.5   | 13  |
| レーテ (Rete)       | 1.9   |       | 12  |       |     |
| 国民投票 (Referen.)  | 0.8   |       | —   |       |     |
| 年金 (Pension.)    | 0.6   |       | —   |       |     |
| 連邦 (Federal.)    | 0.4   | -0.1  | 1   | 0.5   | 3   |
| その他              | 3.3   | +1.9  | 5   | 1.9   | 3   |

La Repubblica, 8 aprile 1992 から作成

## I イタリアの政党政治における地殻変動の徴候

大きくいって、この徴候は、次の二つにまとめることができる。

### (1) 一党優位政党システムの過飽和状態と剝離現象 (supersaturation and exfoliation of the predominant party system)

いうまでもなく、イタリアでは、第二次大戦後から現在にいたるまで一貫して DC が、優越政党となって政権与党の座を占めてきた。<sup>(1)</sup> しかし、こうした DC を中心として形成された政党システムは、1983年総選挙における DC の敗北によっても示されていたように、<sup>(2)</sup> すでに飽和状態に達し、なんらかの抜本的な党内改革、あるいはそれを可能とする政治制度改革が不可避な地点にまで追い込まれていたのである。しかし、こうした飽和状態を打破しようとする試みは、つねに現状維持を志向しようとする DC 党内の派閥力学によって否定されてきたのである。<sup>(3)</sup> ところが、DC のこうした《不作為》は、DC がこれまで牙城としてきた北部イタリアの「白い地帯 (zona bianca)」において、地域主義政党「ロンバルディア同盟 (Lega lombarda)」の急激な台頭を見るという、まったく予想もしなかった形で罰せられることになったのである（北部における DC 支持基盤の剝離現象）。<sup>(4)</sup>

その一方で DC は、80年代の主要な連立パートナーとなったベッティーノ・クラクシの率いる社会党とともに、その支持基盤を南部イタリアに移行させていくという、長期的な構造変化も遂げつつあったのである（いわゆる DC の「南部化 (meridionalizzazione)」）（表2、表3を参照）。<sup>(5)</sup>

このように DC を中心とする一党優位政党システムは、過飽和状態に到達したあげく、今まさに一種の剝離現象に遭遇しつつあるということができるのである。しかし、その解体や崩壊を語るのは、まだ時期尚早であると考えるが、一党優位政党システムが崩壊する過程について、いくつかの点では日本にとっても参考となるような、ひとつのパターンを提供していることだけは間違いない。その意味でも、今回のイタリア総選挙はきわめて重要な意義を持っているといえるのである。

表2 DC 総選挙得票率 北中部と南部の差異

|     | 1946  | 1948  | 1953  | 1958  | 1963  | 1968  | 1972  | 1976  | 1979  | 1983  | 1987  | 1992  |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 北中部 | 35.6  | 47.9  | 40.9  | 41.3  | 36.8  | 37.7  | 37.7  | 37.5  | 36.2  | 30.8  | 31.7  | 25.9  |
| 南部  | 35.0  | 49.6  | 38.3  | 44.4  | 41.5  | 42.2  | 41.2  | 41.3  | 42.9  | 37.3  | 39.7  | 39.3  |
| 差   | - 0.6 | + 1.7 | - 2.6 | + 2.9 | + 4.7 | + 4.5 | + 3.5 | + 3.8 | + 6.7 | + 6.5 | + 8.0 | +13.4 |
| 全国  | 35.2  | 48.5  | 40.1  | 42.4  | 38.3  | 39.1  | 38.8  | 38.7  | 38.3  | 32.9  | 34.3  | 29.7  |

表3 DC 総選挙得票 北中部と南部の比率

|     | 1968  | 1972  | 1976  | 1979  | 1983  | 1987  | 1992  |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 北中部 | 66.6  | 67.3  | 66.5  | 64.7  | 63.3  | 62.6  | 57.3  |
| 南部  | 33.4  | 32.7  | 33.5  | 35.3  | 36.7  | 37.4  | 42.7  |
| 全国  | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |

## (2)政党支配体制における崩壊サイクルの始動 (beginning of the breakdown cycle in the partitocrazia or the rule of parties)

「政党支配体制 (partitocrazia)」というのは、戦後イタリア政治史に固有の jargon の一つであるが、基本的には、政府、国家官僚制、利益団体のいずれに対しても、政党が優位に立つことを意味する。これには、次のような歴史的経緯があった。

イタリアでは伝統的に国家諸制度の威信が低かったが、ファシスト体制の崩壊にともない、それと共犯関係にあった王室、軍部、官僚制の権威も完全に失墜した。そして、それによって生まれた権力の「真空状態 (vacuum)」を埋めることになったのは、ファシスト体制の崩壊以前からすでに北中部でレジスタンス闘争を展開していた反ファシスト諸政党であった。

その一方で、イタリアでは伝統的に、アングロ・サクソンの意味における「市民社会 (civile society)」も未発達であり、政治権力から本質的に自立し、「市民社会」の内部から自発的かつ多元的な利益表現を展開するような結社や利益集団の形成も十分には行われてこなかった。

それゆえ第二次大戦後のイタリアでは、1946年6月2日の体制選択の国民投票においても、翌47年12月21日に採択された共和国憲法の制定においても、中心的な役割を担ったのは反ファシスト諸政党であった。いいかえると戦後のイタリア社会に、政治的・道徳的権威、組織力、指導力、人材などを供給したのは、国家官僚制や企業や市民団体ではなく、まさに政党であったのである。<sup>(6)</sup>

このようにしてイタリアでは、政党が国家諸制度や「市民社会」に対して優位に立つような態勢が生まれていったが、それはDCが長期政権を樹立することによってさらにいっそう加速され、「政党による市民社会の占拠 (occupazione della società civile dai partiti)」といわれる事態にまで進んでいった。すなわちDCは、「陰の統治機構 (sottogoverno)」と呼ばれ、国家・市民生活のほぼ全領域を覆いつくす膨大な公共・半公共セクターを築きあげていった（そのためイタリアには、国家持株会社省 [ministero delle partecipazioni statali] という日本では考えられない特殊な官庁まで存在した）。そしてDCは、こうした「陰の統治機構」が有する役職、雇用、利権といった巨大な資源を、まさに互酬的な縁故関係 (clientelism) という形態をとおして分配することにより、その支持基盤を確保するとともに、拡大していったのである。

さらに重要なことは、このような利益配分機構がDCのみならず、DCと連立政権を組んだ社会党、社会民主党、自由党、(ある時期までは共和党)にまで延長されたことであり、しかも基本的には得票率に対応した比例配分を原則としていたことであった。これをイタリアでは「分割配分制 (lottizzazione)」といい、DC内における派閥間の役職配分についても、この原則が適用されたのである。

また忘れてならないことは、連立政権から一貫して排除され続けてきた、かつての共産党でさえも、地方自治体の水準にとどまるものではあったにせよ、長期間にわたって革新自治体の持つ公的資源を支配することにより、小規模ながらこれに類似する「陰の統治機構」を築きあげるようになったのである。<sup>(7)</sup>

したがって、今回の総選挙は、伝統的諸政党によって築きあげられてきた。このような「政党

支配体制」に対して、多くの有権者が明確な拒否反応を示したことに大きな特徴があった。じっさい、先述した「ロンバルディア同盟」も、ローマに君臨する伝統的諸政党の非能率と不正に対する反感を、その地域主義（反中央集権主義）の重要なエートスとしていたのである。さらに、その意義については後に詳しく述べることにしたいと思うが、一年前の1991年6月9-10日に実施された「下院の優先投票削減に関する国民投票」において、95.6%という圧倒的多数でこれが支持されたことも、自家中毒症状に陥ってしまった「政党支配体制」に対して、何とか風穴を開けたいという有権者の強い意思を示すものであった。

とはいえ「政党支配体制」にかんしても、一党優位政党システムと同様に、その解体や崩壊を語ることはまだ時期尚早である。しかし、今回の選挙結果は、「政党支配体制」がすでに崩壊サイクルに入りはじめたことを、私たちに明瞭に示すものであった。

上に述べた二つの徴候は、いうまでもなく、厳密に考えるならば、イタリアという特殊政治的コンテクストに位置づけられないかぎりには、理解不可能なものである。しかし、1992年の3月下旬からのフランス地方選挙、4月5日のドイツにおけるシュレスウィヒ・ホルシュタイン州とバーデン・ヴュルテンベルク州の州議会選挙、そして今回のイタリア総選挙、4月9日のイギリス総選挙には、それぞれの国が抱える様々な問題とは別に、いくつかの共通する傾向を見いだすことができる。『エコノミスト』は、それを5つのEurotrendsと名付け、次のようにまとめている。<sup>(8)</sup>

- (1)現職に対する反対票（anti-incumbency vote）の噴出〔政権与党に対する反乱〕。
- (2)経済に対する不安（economic anxiety）。
- (3)周縁への離脱（defection to the fringes）〔政権与党のみならず野党をも含めた既成大政党からの離脱と、地域主義政党、エコロジー政党、極右政党などの周縁的な政党・運動への投票〕。
- (4)移民に対する不安（worry over immigration）。
- (5)古い政治の重要性の低下（diminishing importance of the old politics）〔ソ連・東欧の崩壊にともなう伝統的な左-右軸からなるイデオロギー的区別の無意味化、EC統合の深化にともなう各国政府の主権低下、中道政治の活力衰退、大問題よりは身近な問題に関心を集中するという政治的争点の内向化〕。

ここにあげられた特徴のいくつかは、西欧各国のみならず、おそらくはアメリカや日本についても見いだすことができるものであろう。すなわち、既成大政党による既成のデモクラシー（まさに「古い政治」）が飽和状態に達していながらも、そこからの出口が見いだせないことに対する有権者の不満やいらだちの高まりは、先進デモクラシー諸国に共通する現象といえることができる。そして、先に述べたイタリアの政党政治における二つの地殻変動の徴候も、こうしたことを念頭において見るならば、たんにイタリアに固有の現象にとどまらず、それなりの普遍性と同時性をもった現象であることが理解できるであろう。

以上のことを前提として、早速、イタリアにおける1992年4月総選挙の分析に移ることにしよう。

## Ⅱ 1992年4月総選挙

ここでは、1992年4月総選挙の結果について、(1)投票率、(2)DC、(3)社会党、(4)左翼民主党、(5)北部同盟、を中心として、その特徴をかんたんにまとめておきたい。

### (1)棄権の長期増大傾向と《南》《北》格差

まず今回の総選挙の投票率を見てみると87.3%で、前回87年総選挙の88.8%から1.5%減少し、戦後最低を記録した。しかも、棄権に白票と無効票を加えると17.4%もの割合に達し、これを広義の「棄権党 (partito del non voto)」と仮定すると、下院ではDCに次いで第二党に位置することになった。また棄権が多いのは、とりわけ南部で、カラブリア州の投票率は74.1%、シチリア州も77.4%にすぎない。棄権の長期増大傾向は、1979年以来全国的に見られる現象であるが、北部の政治的アパシーが「ロンバルディア同盟」という形をとりつつ「攻撃的アパシー」<sup>(1)</sup>へと転化する兆しが見えるのに対して、南部のそれはますます政治的無力感に陥りつつあるといえよう。これからの分析においても様々な形で示されていくことになると思われるが、イタリアでは、投票行動においても、政党支持においても、政治文化においても、《北》と《南》の格差は、今後ますます強まっていくことになるう。

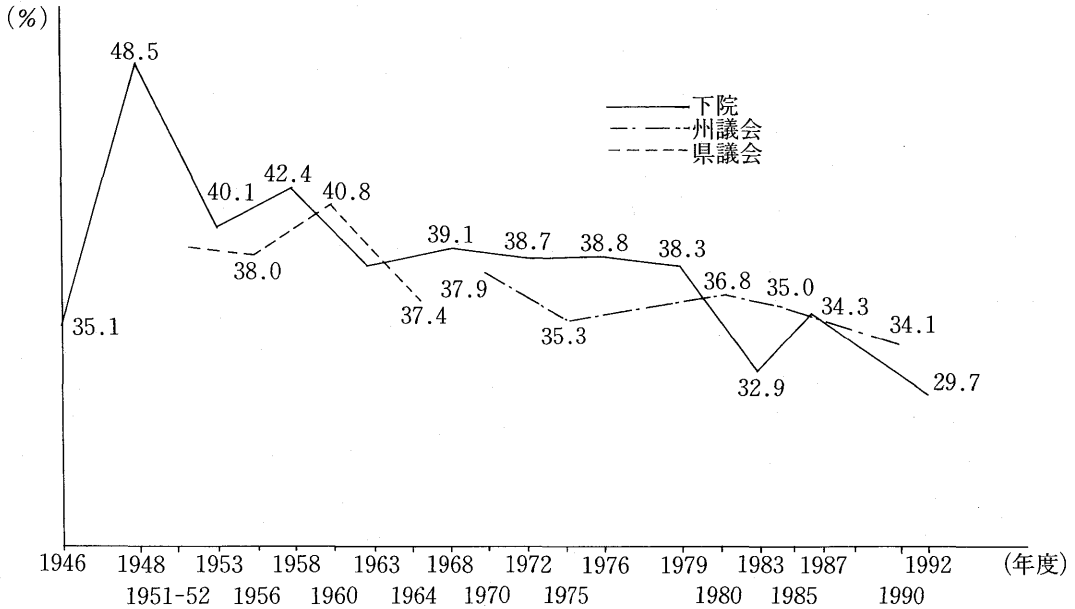
### (2)DC《一党優位 (dominance)》の崩壊

先述したように、DC、社会党、社会民主党、自由党からなる四党連立は、下院議席の過半数はかろうじて維持したものの、得票率のうえでは4.8%も失った結果、完全な少数派 (48.8%) に転落した。なかでも4.6%も得票率が減少したDCの敗北は決定的であった。1990年以来「ロンバルディア同盟」が急成長を遂げていた北部での後退については、すでに織り込み済みであったが、シチリア島を除けば、南部をも含むほぼすべての選挙区で得票を失うということは、予想だにしないことであった。DCのアルナルド・フォルラーニ幹事長は「一貫性ある統治 (governabilità coerente)」をスローガンに選挙戦を展開してきたが、有権者は、まさにそれがDCや政権与党による国家諸制度や市民社会の《占拠》を意味するものであり、「政党支配体制」の同義語でしかないことを、十分に知り抜いていたのである。<sup>(2)</sup>

しかも、DCの得票率が30%の壁を割ってしまい、史上最低の数字を記録したことには、たんなる数字の問題を越える政治的、象徴的な意味があったといえよう。なぜならばDCがもはや「一党優位政党 (dominant party)」としての資格を持ってはいないということを、明瞭に示していたからである。「一党優位政党」であるためには、必ずしも下院の過半数を占める必要はない (いいかえると量的な優位のみを資格要件とはしない)。しかし、過半数の50%を20%も下回り、第二党との差も13%ほどしかない政党を、「一党優位政党」と呼ぶには、やはり無理がある。<sup>(3)</sup> さらにDC得票率の長期低落傾向は、一時的な増減はあったとしても、歴然としている (表4を参照)。今回の総選挙以降、DCを、語の本来の意味において「一党優位政党」と呼ぶことは不可

能になったといえよう。

表4 DC下員、州議会、県議会選挙における得票率



### (3)アジェンダ・セッター (agenda setter) クラクシの敗北

総選挙以前は、社会党の独裁的指導者であるベッティーノ・クラクシ書記長が、次期首相の最有力候補とされてきた。1976年に彼が書記長となって以来、社会党は着実に得票を増やしていったが、今回の総選挙における社会党の得票率は13.6%にとどまり、わずか0.7%ではあるが初めて得票を減らすことになった。だがクラクシの敗北は、こうした数字を越えたところにあった。

クラクシは「金ぴかの80年代 (dorati anni Ottanta)」を代表する政治指導者であった。西欧最大の組織力を誇り、ユーロコミュニズムの旗手であったイタリア共産党が、エンリコ・ベルリンゲル書記長の下で「歴史的妥協 (compromesso storico)」に失敗して権力の座から遠ざかってしまった80年以降は、DC－社会党－共和党－社会民主党－自由党からなる「五党連立体制 (pentapartito)」が定着した。この「五党連立体制」において agenda setting (すなわち政策的なイニシャチヴ) をリードしたのはDCではなく、得票率にしてわずか10%しかなかった連立与党第二党、社会党の書記長クラクシであった。<sup>(4)</sup> というのもクラクシは、「五党連立体制」における「要政党 (pivotal party)」の立場を巧みに利用することにより casting vote を掌握したばかりか、レーガン、サッチャー、中曽根の全盛期には、市場原理に基づく「競争」と「効率」という「新保守主義」のモチーフまでもDCから横取りし、まさに新時代のニューリーダーとしての役割を演じることに成功したからである。<sup>(5)</sup>

さらに、クラクシは、イタリア史上初の社会党出身の首相として、1981年から2期、3年7ヵ月に及ぶ、この国としては異例の長期政権の樹立に成功した。そればかりか、「スカーラ・モービレ (scala mobile)」[1975年に3大労組と工業経営者連盟が締結した賃金の対物価自動スライド制]の手直しを初めとする強力な経済、財政政策手腕を発揮し、「決断主義 (decisionism)」がイタリアにおいてもまだ可能であることを、身をもって示したのである。<sup>(6)</sup>

いうまでもなく、こうしたクラクシの行動によって、DCの「統治能力 (governability)」のイメージは大きく損なわれることになった。1982年に幹事長に選出されたチリーアコ・デ・ミータは、左派の派閥「バーゼ (Base)」の領袖としてDC内の改革派を糾合することによって、党改革を行うとともに根本的な政策転換[利益配分政治から緊縮政策への]を図ろうとし、88年4月からは、この国としては異例のDC幹事長と首相の兼任にまで踏み切った。しかしデ・ミータの独裁的な党支配よりは、既得権の維持のためにもクラクシとの連携を好むDC内の伝統的な「利益派閥 (interest faction)」の抵抗により、デ・ミータは、党改革も政策転換も実現することなく、一年後の89年4月には退陣を余儀なくされたのである。<sup>(7)</sup>そして、こうしたDCの immobilism は、社会党の近代的で活動的なイメージを、さらにいっそう印象づけることになったのである。

表5 1992年総選挙下院得票率  
ミラノ市

| (投票率88.5%) |          |            |             |
|------------|----------|------------|-------------|
|            | 92年<br>% | 87年<br>%   | 90年地方選<br>% |
| Dc         | 16.3     | 24.4       | 20.0        |
| Pds        | 13.8     | Pci 22.9   | 19.9        |
| Rifond.    | 5.4      | Dp 3.4     | 1.6         |
| Psi        | 13.2     | 18.6       | 17.4        |
| Msi        | 4.9      | 6.8        | 3.8         |
| Pri        | 8.5      | 7.6        | 5.6         |
| Pli        | 4.1      | 3.5        | 2.7         |
| Psdi       | 1.3      | 1.9        | 1.5         |
| Lega       | 18.1     | 0.7        | 13.6        |
| Pannella   | 2.3      | Radic. 4.1 | Antip. 1.5  |
| Verdi      | 3.8      | 4.4        | 6.3         |
| Rete       | 2.8      | —          | —           |
| Referen.   | 0.9      | —          | —           |
| Pension.   | 1.4      | 0.9        | 3.5         |
| L.Al.Lum   | 1.4      | —          | —           |
| Altri      | 1.8      | 0.8        | 2.6         |

*La Repubblica*, 8 Aprile 1992

クラクシの究極の目標は、制度改革であった。すなわち国民投票によって、フランス第五共和制型の強力な行政権限をもつ大統領制を導入し(いいかえると「第二共和制」へと移行することになる)、直接選挙によって自らが大統領に選出されることを考えていたのである。したがって社会党は、制度改革においても他党に先駆けて世論をリードしていたのである。

しかし、今回の総選挙は、こうしたクラクシのイメージがまさに地に堕ちてしまったことを示していた。とくにミラノでは社会党が大規模な汚職事件に関与していたことが発覚したこともあって、社会党は5.4%もの得票を失い、「北部同盟」(18.1%)、DC (16.3%)、左翼民主党 (13.8%) につづく第四党の地位 (13.2%) に甘んじることを余儀なくされたのである(表5を参照)。候補者個人に投票される「優先票 (preference voting)」を見ても、第一位は「北部同盟」のウンベルト・ボッシ (24万票)、第二位はシチリアの反マフィア運動「レーテ (rete)」の指導者レオルuca・オルランド (13万4千票)、第三位は左翼民主党の書記長アキッレ・オクケット (10万票) であったのに対して、第四位 (9万4千票) にとどまったのである。

さらに重要なことは、社会党の得票率が、北部では11.9%と前回より2.8%も減少したのにならして、南部では17.8%と前回より3%も増えたことであった（中部では12.8%と0.1%減、島嶼部では14.4%と0.4%増）。すなわち、社会党は「五党連立体制」に加わったクラクシの時代をへることによって、北部工業地帯に基礎をおく対抗政党から南部に基礎をおく政権与党へと完全に転換することになったのである。いいかえると社会党も、まさにDCと同じような形で《南部化》していったのであり、連立パートナーとしてDCを補完するかわりに、これまでDCが独占していた利益配分機構の一角に食い込んでいったのである。<sup>(8)</sup>

しかし、社会党は《与党化》《南部化》《利益政党化》によって勢力拡大を成し遂げ、一定の支持基盤を固めたものの、80年代の初めにそれが持っていた近代的な改革の党という新鮮なイメージを決定的に喪失することになった。そして今回の総選挙は、社会党もDCと同様に、利権漁りや腐敗と縁の切れない「古い政治」を代表する既成政党のひとつに外ならず、その党首であるクラクシには、もはや何の魅力もないということを告げるものであった。そのような意味で、クラクシの敗北は決定的だったのである。

#### (4) 《左翼》の減衰：左翼民主党の不振

今回の総選挙のおよそ一年前の1991年2月3日に、イタリア共産党は70年の歴史に幕を降ろし、その名称を正式に左翼民主党（Partito democratico di sinistra）に変更した。<sup>(9)</sup> しかしオクケット書記長が、89年11月の中央委員会における決定以来一年以上もの時間をかけて準備したこの起死回生の策も、すべての党員の受け入れるところとはならず、結局はアルマンド・コッスッタやセルジョ・ガラヴィーニなどの左派あるいは旧ソ連派の古参党员を中心として「共産党再建派（Rifondazione Comunista）」の名の下に、分派が形成されることになった。

共産党は前回87年には26.6%を獲得していたが、今回、左翼民主党はそれを10%以上も下回る16.1%にとどまり、党勢の退潮を食い止めることはできなかった。他方「共産党再建派」は予想外の健闘を示し、5.6%もの支持を獲得した。しかし両者の得票率を合計しても21.7%にしかならず、分裂だけが左翼民主党の不振の原因でないことは明らかであった。すなわち党名変更はたんなるきっかけにすぎず（それだけで党勢を回復することは不可能である）、いかにして大衆政党型の党構造を変革していくのか、いかにして《左翼》勢力それ自体のヘゲモニーを回復していくのか、今現在いかなる政権構想をもっているのか、といった点についての戦略的展望が明確にならないかぎり、世論はいつまでたっても過去の記憶を下敷として左翼民主党を見つづけることになるであろう。

唯一の希望は、政治指導者としてのオクケットに対する世論の高い評価である。左翼民主党はいまなお下院第二党の地位にあり、党内におけるオクケット書記長の権力は今のところ不動である。したがって、DCの壁が崩れ、クラクシの威信が失墜し始めたことを考慮に入れるならば、オクケットは、今後の政界再編成についても近い将来予想されうる政治改革についても、いまなお、あるいは今まで以上に重要な戦略的立場を占めることになったといえよう。<sup>(10)</sup>

### (5)「北部同盟」の大躍進とカトリック・サブカルチャー地帯の陥落

今回の総選挙の最大の勝利者は、48歳のウンベルト・ボッシを指導者とする「ロンバルディア同盟 (Lega Lombarda)」が中心となり、これに「ヴェネト同盟 (Lega Veneta)」, 「ピエモンテ北部同盟 (Lega Nord Piemonte)」が連合した地域主義運動「北部同盟 (Lega Nord)」であった。「北部同盟」は前回の得票率0.7%, 下院1議席に対して、今回は8.7%, 55議席を獲得するという大躍進を遂げた。90年の州議会選挙での得票率4.6%と比べても、今回の総選挙における「北部同盟」の異常ともいえる急成長ぶりは明らかであろう。

こうして「北部同盟」は、下院においてDC (206議席), 左翼民主党 (107議席), 社会党 (92議席) につぐ第四党となり、共和党 (27議席), 自由党 (17議席), 社会民主党 (16議席) などの伝統的諸政党をはるかに凌ぐ大政党として議会に登場することになったのである (表1を参照)。

**表6 1992年総選挙下院得票率  
コモ＝ソンドリオ＝ヴァレーゼ選挙区**

| (投票率 92.0%) |      |    |            |    |             |
|-------------|------|----|------------|----|-------------|
|             | 92年  |    | 87年        |    | 90年地方選      |
|             | %    | 議席 | %          | 議席 | %           |
| Dc          | 25.5 | 5  | 35.5       | 7  | 30.5        |
| Pds         | 8.4  | 2  | Pci 18.2   | 4  | 13.8        |
| Rifond.     | 4.0  | 1  | Dp 1.8     | —  | 1.1         |
| Psi         | 13.3 | 3  | 17.6       | 4  | 14.0        |
| Msi         | 3.2  | 1  | 4.6        | 1  | 2.4         |
| Pri         | 3.0  | —  | 3.5        | 1  | 1.9         |
| Pli         | 2.4  | —  | 2.7        | 1  | 1.5         |
| Psdi        | 1.7  | —  | 2.6        | —  | 2.0         |
| Lega        | 28.6 | 6  | 6.7        | 1  | 22.5        |
| Pannella    | 1.2  | —  | Radic. 2.7 | —  | Antipr. 0.9 |
| Verdi       | 3.1  | 1  | 3.1        | 1  | 5.4         |
| Rete        | 1.7  | —  | —          | —  | —           |
| Referen.    | 0.7  | —  | —          | —  | —           |
| Pension.    | 1.0  | —  | 0.8        | —  | 1.3         |
| Altri       | 2.2  | —  | 0.2        | —  | 2.7         |

ただ、これは全国的に均した数字であり、特定の地域に注目するならば「北部同盟」の躍進は、いっそう劇的なものであった。なかでもミラノ市において「北部同盟」の得票率は18.1%に達し、DC (16.3%), 左翼民主党の (13.8%), 社会党 (13.2%) を凌駕して、第一位となった (表5を参照)。同様に、ロンバルディア州のコモ・ソンドリオ・ヴァレーゼ選挙区でも「北部同盟」は28.6%を獲得し、DC (25.5%), 社会党 (13.3%), 左翼民主党 (8.4%) を追いついて、第一位となったのである (表6を参照)。

しかし、91年11月24日の市議会選挙で「ロンバルディア同盟」が得票率24.4%, 14議席を獲得し、DC (23.3%, 13議席) を追いついたロンバルディア州のブレーシャ市を含むブレーシャ・ベルガモ選挙区では、予想に反して「北部同盟」は、DC の32.1%について第二位にとどまり (得票率は25.2%), 90年州議会選挙の25.8%と比べても0.6%の減少となったのである (表7を参照)。

《Brescia la bianca [白いブレーシャ]》と呼ばれるこの都市は、ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティエーニ (後の教皇パウロ 6

*La Repubblica*, 8 Aprile 1992

世)の生まれ故郷であり、ベルガモとともにカトリック勢力の伝統的な牙城であった。またDC左派の三大指導者(チリニアコ・デ・ミータ、ガイド・ボドラートと並んで)の一人ミーノ・マルティナッツォーリの地元でもあった。それゆえ91年11月市議会選挙で「ロンバルディア同盟」に敗北を喫したことは、DCにとっては極めて重大な意味をもっていたのである(表8を参照)。<sup>(11)</sup>

ところが、今回の総選挙では、これらの都市で「北部同盟」は予想されたほどには票を伸ばさなかったのである。そのかぎりにおいては、DCにも多少の抵抗力があったといえよう。

それにもかかわらず、ブレシャ・ベルガモ選挙区のDC得票率は前回と比べ12%も減少したのである。したがって「北部同盟」が伝統的なカトリック・サブカルチャー地帯「白い地帯(zona bianca)」を大規模に侵食するという基本的な構図そのものが、否定されたわけではなかったのである。じっさい「白い地帯」の崩壊という点では、ヴェネツィア・トレヴィーゾ選挙区(DCの得票率28.1%, 対前回比10.4%減,「同盟」は17.3%),ヴェローナ・パドヴァ・ヴィチエンツァ・ロヴィーゴ選挙区(DCは33.9%, 13.3%減,「同盟」17.4%)を見ても、明らかであった。

今回の総選挙では、第一に、DCの《一党優位》が明確に否定されたこと、第二に、DCと社会党がヘゲモニーを握る四党連立体制が否認されたこと、第三に、左翼民主党をも含む既成政党がこれまで構築してきた「政党支配体制」(あるいは既成政治階級)そのものが拒否されたこと、第四に、政治態度や政治文化における《南》《北》格差がますます増大しつつあること、第五に、こうした国民の「もうたくさん(basta)」という抗議の声に形を与えたのが政党システムのfringeに位置する「北部同盟」や「レーテ」であったこと、第六に、旧《左翼》サブカルチャーの瓦解に連動するような形でDCカトリック・サブカルチャーの解体が引き起こされたこと、第七に、カトリック・サブカルチャーの解体による空白を埋める形で「北部同盟」が進出しつつあること、を基本的な特徴としていた。

表7 1992年総選挙下院得票率  
ブレシャ=ベルガモ選挙区

| (投票率 93.6%) |      |    |           |    |             |
|-------------|------|----|-----------|----|-------------|
|             | 92年  |    | 87年       |    | 90年地方選      |
|             | %    | 議席 | %         | 議席 | %           |
| Dc          | 32.1 | 7  | 44.1      | 10 | 36.6        |
| Pds         | 8.6  | 2  | Pci 18.4  | 4  | 13.1        |
| Rifond.     | 3.3  | 1  | Dp 2.0    | 1  | 1.0         |
| Psi         | 9.6  | 2  | 14.6      | 3  | 9.8         |
| Msi         | 3.0  | 1  | 4.2       | 1  | 2.2         |
| Pri         | 2.8  | 1  | 2.8       | 1  | 1.7         |
| Pli         | 2.0  | —  | 1.8       | —  | 1.0         |
| Psdi        | 0.8  | —  | 1.9       | —  | 1.2         |
| Lega        | 25.2 | 6  | 3.8       | —  | 25.8        |
| Pannella    | 1.0  | —  | Radic 2.3 | —  | Antipr. 0.8 |
| Verdi       | 2.4  | 1  | 2.8       | 1  | 4.1         |
| Rete        | 1.3  | —  | —         | —  | —           |
| Referen.    | 0.5  | —  | —         | —  | —           |
| Pension.    | 1.2  | —  | 1.1       | —  | 1.5         |
| Caccia      | 0.4  | —  | —         | —  | 1.2         |
| Altri       | 5.8  | —  | 0.2       | —  | —           |

La Repubblica, 8 Aprile 1992

表 8 1991年11月24日 ブレーシャ 市議会選挙

|                        | 91年市議会選 |    | 90年市議会選 |    | 87年総選挙 |
|------------------------|---------|----|---------|----|--------|
|                        | %       | 議席 | %       | 議席 | %      |
| Dc                     | 23.34   | 13 | 31.9    | 17 | 34.1   |
| Psi                    | 10.33   | 5  | 12.9    | 7  | 15.5   |
| Pds                    | 9.45    | 5  | —       | —  | —      |
| Rif.com.               | 5.31    | 3  | —       | —  | —      |
| Pci                    |         |    | 16.4    | 9  | 22.1   |
| Dp                     |         |    | 1.4     | —  | 2.3    |
| Lega lombarda          | 24.41   | 14 | 20.1    | 11 | 1.7    |
| Per Brescia/Rete/Verdi | 4.71    | 2  | —       | —  | —      |
| Verdi                  |         |    | 4.7     | 2  | 3.6    |
| Msi                    | 3.74    | 2  | 2.6     | 1  | 5.8    |
| Pri                    | 5.55    | 3  | 3.6     | 2  | 4.9    |
| Pli                    | 3.34    | 1  | 1.9     | 1  | 3.6    |
| Psdi                   | 1.60    | —  | 1.7     | —  | 1.9    |
| Casal/Pension.         | 4.98    | 2  | —       | —  | —      |
| Pension.               | 1.39    |    | 1.8     | —  | —      |
| Pension.Brescia        | 0.78    |    | —       | —  | —      |
| Altri                  | 0.07    |    | 1.0     |    | 4.5    |
| 投票率                    | 89.2%   |    | 92.6%   |    | 94.1%  |
| 白票                     | 1.50%   |    | 2.0%    |    | 1.4%   |
| 無効票                    | 2.63%   |    | 4.3%    |    | 3.4%   |

*La Repubblica*, 26 novembre 1991

そこで次に、第七番目の特徴としてあげた「北部同盟」に焦点を合わせ、より詳細な分析を加えたいと考える。というのも、「北部同盟」こそは、90年代初頭におけるイタリア政治の変容を特徴づける最も新しい現象と考えられるからである。

### Ⅲ 「同盟〔レガ〕」現象

「同盟 (Lega) [レガ]」(ここでは「北部同盟」と「ロンバルディア同盟」を基本的には同じものとする) が、89年のヨーロッパ議会選挙をひとつの踏台とし、90年のロンバルディア州議会選挙、同州の県議会選挙、市議会選挙といった地方選挙において、飛躍的な成長を遂げたことは、大きな驚きをもって迎えられた。だが多くの人々は、そのマニフェストや綱領が含む一種の荒唐無稽さやファナティズム、また指導者にしてイデオログであるウンベルト・ボッシのカリスマや経験の乏しさから、「同盟」はしょせん一時的な流行現象であるとの印象を、どうしても拭い去ることができなかったのである。しかし、今回の総選挙でさらに大きく成長したことにより、「同盟」がある程度までの持続性を確保したことだけは間違いないように思われる。

ただ「同盟」が、既成政党との差異を強調する《反-政党 (antiparty)》を標榜しながらも、下院第四党という大政党となり、いずれにせよ既成諸政党との議会主義的駆引きが不可避となっ

てしまったいま、もしこうした駆引きに失敗するようなことがあるならば、有権者が一挙に「同盟」離れを起こす可能性は、まだいぜんとして残っている。あるいは「同盟」が、center/periphery という cleavage をあえて争点化しようとする地域主義運動に固執するならば、特定地域の征服は可能であるとしても、その本質からして絶対に普遍化（すなわち全国化）しえないという宿命が潜んでいるといえるのであり、その点からしても、ピークにまで到達したとたん一挙に衰退してしまうという可能性は十分にあると考えられる。

いずれにせよ「同盟」はいまだ生成中の運動体であり、今の時点でその将来を予測することはきわめて困難である。そこで、ここでは予測というよりは、「同盟」についての、政党論や選挙分析の観点からは余り重要ではないが、たとえ挿話的ではあれ運動の本質を理解するうえでは基本的となる、いくつかの情報（とくに我国では余り知られていないと思われる）を整理することによって、「同盟」現象のもつ意味を検討してみたいと考える。

#### (1)指導者ボッシと「同盟」結成の経緯

ロンバルディア同盟の若き指導者ウンベルト・ボッシは、1944年北イタリアのヴァレーゼ県カッサーノ・ディ・マニャーノに生まれた。父親は工場労働のかたわら農業を営む、兼業小自作農であった。そして父親は、北イタリアの小自作農においては典型的ともいえるカトリック信仰をもった家系の出身で、ウンベルトの叔父はイエズス会士であった。母親は父親よりも貧しい労働者階級の出身であったが、社会主義の空気を吸って育ったことから、知的関心は夫よりは遥かに高かった。また母方の曾祖父は海外移民の経験があった。

ボッシが15歳のとき、交通事故の賠償金支払いのために農地を売却せざるをえなくなり、一家はたちまちのうちに困窮状態に陥ってしまった。そのため16歳から工場労働者として働いた。その傍ら電気技術を独修し、23歳になって初めて夜間高校に通うことになった。その後30歳で結婚し一子をもうけた。また同じ頃にパヴィーア大学医学部に登録し、35歳からは外科診療病棟の手術室で応用電気技師として働きながら、勉強を続けた。

その35の年に(1979年)、まったく偶然に「ヴァッレ・ダオスタ連合(Union Valdôtaine)」〔ヴァッレ・ダオスタは少数言語としてフランス語を使用する地域〕の指導者ブルーノ・サルヴァドーリと知り合った。そしてその感化のもとに、80年地方選に際して「北西ロンバルディア自治連合(Unione Nord-Occidentale Lombardia per l'Autonomia)」を結成した。ところが80年6月にサルヴァドーリが突然交通事故死したため、ボッシは、彼に対する運動費用の債務保証によって生じた多額の負債の返済に追われることになり、そのせいで離婚することにもなった。その一方で、地域主義者としての信念はますます固くなり、運動に専念するとともに、ロンバルディア方言や地域文化などについて猛勉強し始めた。そして地域主義運動の同志であったマヌエレ・マルローネと再婚し、新たに一子をもうけることにもなった。

こうしてウンベルトは、その後(1981-82年)も、「ロンバルディア人にロンバルディアを」をスローガンとする、地域主義運動の小グループを指導し続けた。そして、その過程でひとつの

《神話》を発掘することになった。すなわち12世紀に、神聖ローマ皇帝フリードリヒ・バルバロッサに対抗してロンバルディア、ヴェネト、エミールリアにあった20の教皇派 (guelfo) 都市が結成したロンバルディア都市同盟に、運動の歴史的な根拠を求めることになったのである。こうして運動は「ロンバルディア自主主義同盟 (Lega Autonomista Lombarda)」と名付けられることになり、抜刀したレニャーノ (Legnano) [1176年フリードリヒ・バルバロッサはこの地で歴史的な大敗を喫し、1183年ロンバルディア都市同盟に自治権を付与するきっかけとなった] の戦士がそのシンボル・マークとなった。

ただ皮肉なことに、この《神話》は、キリスト教民主党のシンボル・マークが依拠するところのものでもあった。すなわち、白い楯に青の十字架、その十字架には自由 (Libertas) の一文字が記されるという DC のシンボル・マークは、まさにこの歴史的なロンバルディア都市同盟に由来するものだったのである。

以上がボッシの経歴であり、「同盟」結成の経緯であった。<sup>(1)</sup>

次に「ロンバルディア同盟」の政治綱領 (1982年の綱領および1983年の綱領がある) を、いくつかの論点にまとめ、それぞれについて検討を加えてゆきたい。<sup>(2)</sup>

## (2) 地域主義 (regionalism)

「同盟」の第一目標は、中央集権国家イタリアを自治州からなる連邦国家 (confederazione di regioni autonomi) に変革することをとおして、ロンバルディアの自治権 (autogoverno) を回復することにあった。そして、ロンバルディアには、独自の文化、歴史、言語、社会的、道徳的価値観からなる一つの「民族的アイデンティティ」があるということを、その主張の重要な出発点としていた。

ただ、こうした地域主義運動それ自体は、「同盟」が「ヴァッレ・ダオスタ連合」の影響下に発足したことや、イタリアにおいても、例えばサルデーニャ行動党 (Partito sardo d'azione) や南チロル国民党 (Südtiroler Volkspartei) などが存在したことからも明らかのように、すでに長い歴史をもっていた。

「同盟」がこれら先行する地域主義運動と本質的に異なる点は、ロンバルディアには、少数言語使用者、ないし少数民族 (ethnicity) としての被差別感が歴史的に見ても皆無だったことである。つまり、ロンバルディアの「民族的アイデンティティ」の主張は、きわめて人為的に誇張された (その意味で荒唐無稽な) 議論であり、歴史的にみても、現実においても、説得力ある根拠がなかったのである。しかもこの地域が、個人所得、就学率、第三次産業従事者比率などのいずれの社会・経済指標をとっても、イタリアで最も裕福な地域に属しており、差別や抑圧や貧困の対極に位置していることは、いうまでもなかった。<sup>(3)</sup>したがって、これまで center/periphery の cleavage が、この地域で争点とならなかったのも当然のことであり、この地域がまさに center (地理的な意味においてではない) に属していたからに外ならなかったのである。

いいかえると「同盟」は、本質的な争点としてではなく選択的な争点として、地域主義という

争点を人為的に創造したのである。だからこそ、先行する地域主義運動かマイナーな性格や地域的限定性を払拭できなかったのにたいして、ロンバルディアを越え、かんたんにヴェネトやピエモンテにまで拡大することが可能となったのである。<sup>(4)</sup> それゆえ「同盟」を、従来の言語や ethnicity にもとづく地域運動と混同することは、大きな誤りであるとする（そのような意味において、梶田孝道氏の「同盟」についての記述には根本的な誤りがあるとする）。<sup>(5)</sup>

しかし地域主義を選択的な争点とすることにより、「同盟」はひとつの重要な利点を得ることになった。それは、地域主義という争点をとおして、非特権的な少数者 ethnicity の権利保護という論点（ここでは類比的にこれを affirmative action と名付けてこう）を撰取することにより、本質的には特権を享受している富裕な地域であるにもかかわらず、自分たちにも同様の affirmative action が必要であるという論理（あるいは詭弁）を、合理化することができるようになったことである。事実「同盟」は、ロンバルディアの税制、財政自主権を唱えるときには、トレンティーノや南チロルのそれを論拠に挙げていたのである。ちょうど《逆差別》という表現が米国の白人たちに affirmative action を攻撃する機会を与えたのと同じように、地域主義は、富裕な北部の人々が自らの既得権を防衛するための極めて便利な理屈を提供することになったのである。

### (3) 《反ローマ》と《反政党》

「同盟」は、《反ローマ》、すなわち中央集権国家（中央政府）、およびそれを支える既成諸政党に対する反対を、重要な論点としていた。そして国民投票に基づいて直接民主主義を拡大し、政治的な決定権を県や市町村に分権化することを主張した。さらに州を単位とする税制・財政政策や、住宅、医療、保険、年金、産業、雇用、自然環境保護などの政策を唱えた。

「同盟」のこうした《反ローマ》感情や《反政党》政治の根底にあるのは、国民国家が地域をたんなる行政単位に分割することによって生み出したものは「政治的アイデンティティなき大衆」に外ならず、国民国家が同質的な《イタリア人》を創出したというのも「空想的な幻影」にすぎないという認識であった。そして、たとえいかなるものであれロンバルディアに存在する国家装置や公共機関は、すべて中央集権政府のものであり、「我らの仲間 (nostra gente)」の犠牲のうえに「よそ者 (forestieri)」の特権を固ろうとするものでしかないという認識だったのである。こうした国家の「他者性」という感覚は、他の欧米諸国でも見られた「納税者の反乱」にも共通する一面があった。

だが、いうまでもなく、こうした感情は、基本的には、政権交代のないまま「一党優位政党システム」や「政党支配体制」が半永久的に継続しているイタリア・デモクラシーの immobilism あるいは disfunction にたいする鬱屈した不満にもとづくものであった。とりわけ、平均的なイタリア人よりも高い政治的関心があり、情報量も豊かなロンバルディアの有権者は、出口のないこうした不満のはけ口として、新たなチャンネルを求めようとしていた。そして、そのチャンネルのひとつとなったのが「同盟」だったのである。<sup>(6)</sup>

#### (4)新しい《よそ者》嫌い (neo-xenophobia)

「同盟」の地域主義の顕著な特徴は、自らの ethnic identity (たとえ偽制的なものではあれ) を成立させる we/they 二項対立軸の後者に相当するものとして、外国人一般だけではなく、なにかずくイタリア南部出身者を標的に据えたことにあった。つまり、彼らのいう「よそ者」とは、具体的には、北部イタリア人が南部人に対して用いる蔑称である *terrone* のことを指していたのである。

「同盟」によれば、ロンバルディア人が納めた税金は、ローマの中央政府や、それに群がる腐敗墮落した政党の手を経ることにより、最終的には、そうした政党の client である南部人のあいだで分配され、むなしく浪費されてしまうのである。したがって、すでに述べたような連邦主義や地域自治や地方分権は、「同盟」とっては、こうした不合理（北部人にとっての）を是正するために必要な基本的な手段であった。しかし、もしこれだけであれば、たんなる「納税者の反乱」とどまったであろう。

だが「同盟」の南部人嫌いは、そうした次元を越えて、ロンバルディアに居住する南部人の排斥や差別的処遇を主張するまでに至っていたのである。例えば1982年の政治綱領には「第5条：ロンバルディアの公営住宅や公的補助を受けて建設された建造物は、ロンバルディア人に割り当てる」、「第9条：ロンバルディア人労働者には、他地域出身者よりも優先的に雇用を保障する。またこの措置は、他地域に移住したものの、ロンバルディアに帰郷し再定住することを望む同地出身者にも適用されるものとする」、「第10条：他地域出身者がその出身地に帰郷するのを促進するような段階的経済措置を考案する」のような主張があった。

そして、これらの主張は、次のような条文を最後におくことによって、論理的にというよりは感情的、情緒的に（あくまでも北部人にとっての）正当化されることになった。「第15条：ロンバルディアを強制的留地として使用することを禁止する。また凶悪犯罪を犯したり、誘拐、恐喝、麻薬密売に関与した移住者は、最終的には追放されるものとする」。すなわちマフィア（シチリア）、カモッラ（ナポリ）、ンドラゲータ（カラブリア）といった南部に誕生した組織犯罪を連想させることにより、南部人排斥の正当性が根拠づけられたのである。

それでは、「同盟」のこうした xenophobia を人種主義 (racism) と見なすことは、可能なのであろうか。もちろん人種主義の一面があることは否定できないが、以上の分析からも分かるように、攻撃的、暴力的な人種主義というよりは、中産階級の既得権擁護や生活防衛といった性格が極めて強いように思われる（南部人や外国人もその地域から出て行けば、それでよいとする）。その意味では、イタリ政治学者パスクイーノのいうように、人種主義よりは社会的な不寛容 (intolerance) と名付けたほうがよいのかもしれない。<sup>(7)</sup>

しかし、こうした防衛的な neo-xenophobia は、露骨なナチ的、生物学的人種主義とは異なるからこそ、かえって生活保守主義の充満した日本のような国にも、広まる可能性が高いといえるものかもしれないのである。

## むすびにかえて

イタリアの正当政治の地殻変動を説明するためには、今までに述べたことのほかに、EC 市場統合を目前にひかえながらも一向に進捗しない財政再建の問題、<sup>(1)</sup>《第二共和制（seconda repubblica）》に向かおうとする様々な制度改革論議、<sup>(2)</sup>さらには猖獗を極めるマフィアの暴力犯罪の問題<sup>(3)</sup>についても、検討しなければならない。しかし、紙幅の関係からここではそれは割愛し、今回の総選挙以前に、一党優位政党システムと政党支配体制の地殻変動を予告していたと思われる、二つの出来事を紹介することにより、むすびに代えたいと考える。

### （1）「下院の優先投票削減にかんする国民投票」

1991年6月9－10日の「下院の優先投票削減にかんする国民投票」の中心となったのは、DC のアウトサイダー的な代議士マリオ・セーニであった。彼は1941年サルデーニャ島のサッサリに生まれた。父アントニオは大地主であったが、DC 左派代議士として農相となって農地改革を推進したのち1962－64年にはイタリア共和国大統領となった人物であった。

ところで、イタリアの下院選挙法では、政党名を選択したのちに、政党候補者名簿から3人（場合によれば4人）まで選んで「優先票（voto di preferenza）」が投票できることになっていた。そして、候補者個人が獲得した優先票の獲得数は、政治家が地域や政党や派閥において占める実力を表示するものと考えられていた。そのため、とくに clientelism の強い南部では、優先票と交換に利益誘導が行われるという腐敗選挙が常態化していたのである（事実、優先票の利用度は、北部18％、中部24％に対して、南部は47％にのぼっていた）。<sup>(4)</sup>

セーニの推進した国民投票は、ある意味では極めてささやかな目標を掲げたものであった。というのも、1）優先票を1票に減らす、2）候補者名簿に番号を記すのではなく氏名をはっきりと記載する、ということだけであったからである。だが、その真の狙いが、腐敗選挙の追放による「政治の道義性の回復（moralizzazione della politica）」であることは明らかであった。<sup>(5)</sup>

セーニの提案は、かつて「カトリック大学生連盟（FUCI）」加入していたフランコ・バッサニーニ（現在は左翼民主党系無所属）を通じて左翼民主党による支持をも獲得し、「カトリック行動団（ACI）」や「カトリック勤労者協会（ACLI）」などのカトリック諸団体、さらには共和党や自由党や緑の党、「イタリア工業経営者連盟（Confindustria）」までもが支持するところのものとなったのである。<sup>(6)</sup> 唯一反対したのは（憲法違反であるとの口実のもとに）、《南部北》を進めることにより党勢を拡大してきた社会党のクラクシであった（DC は、これに賛成できるはずがなかったが、党内分裂の公然化を回避するために自由投票とした）。

この国民投票は、50％以上の規定投票率を達成しうるかどうかが危ぶまれていたが、蓋を開けてみると投票率62.5％、賛成95.6％、反対4.4％と、3千万人にも及ぶ圧倒的な支持を集めることに成功したのである。投票率はパドヴァ（79％）、ベルガモ（74％）などの「白い地帯」で極めて高く、ボローニャ（73％）のような「赤い地帯」もこれに続いた。しかし南部では50％台にと

表9 下院の優先投票削減にかんする国民投票  
(1991年6月9-10日)

|          | 投票率  | 賛成   | 反対  |
|----------|------|------|-----|
| 全国       | 62.5 | 95.6 | 4.4 |
| 北部       | 68.3 | 95.7 | 4.3 |
| 中部       | 64.4 | 95.8 | 4.2 |
| 南部       | 53.5 | 95.4 | 4.6 |
| 島部       | 55.3 | 94.7 | 5.3 |
| ロンバルディア  | 67.2 | 95.3 | 4.7 |
| (ベルガモ)   | 74.1 | 96.2 | 3.8 |
| (ブレージャ)  | 71.5 | 94.5 | 2.9 |
| ヴェネト     | 73.8 | 95.9 | 4.1 |
| エミール・    |      |      |     |
| ロマーニャ    | 71.7 | 96.1 | 3.9 |
| (ボローニャ)  | 72.7 | 96.9 | 4.2 |
| ラツィオ     | 62.8 | 95.8 | 4.2 |
| カンパーニア   | 52.6 | 95.9 | 4.1 |
| カラブリア    | 45.5 | 95.2 | 4.8 |
| シチーリア    | 54.0 | 94.0 | 6.0 |
| (パレルモ)   | 50.4 | 93.2 | 6.8 |
| * ( ) は市 |      |      |     |

総投票数：2938万3273票

有効票：2817万 127票

無効票：121万3146票

(白票：56万5677票

無効票：4万8536票)

賛成票：2692万2176票

反対票：124万7951票

*La Repubblica*, 11 giugno 1991

どまり、カラブリア州では46%と50%にも達しなかった(表9を参照)。これも《南》《北》の政治的な格差の拡大を示すものであったといえよう。

この国民投票は、『レプブリカ』紙の主筆エウジェニオ・スカルファーリが「6月10日は共和制民主主義の祝祭日となった」<sup>(7)</sup>と手放しで喜んだように、DCを中心とする一党優位政党システムや政党支配体制の腐敗や頹廃に対して、国民が「道徳的な抗議」の声をあげる重要な機会となったのであり、今回の総選挙結果を明瞭に予告するものとなったのである。

## (2)カトリック教会のDC批判

DCはイタリアで唯一カトリック教会の支持を受けた政党であった。もちろん、たてまえてはDCと教会のあいだには明確な一線が引かれていた。そして教会は、選挙に際しては、イタリア司教会議 CEI (Conferenza Episcopale Italiana) をつうじて「カトリック教徒の統一」を呼びかけることにより、間

接的にDCへの投票を訴えるという形をとってきたのである。

ところが、教皇庁の機関紙『オッセルヴァトーレ・ロマーノ』(4月7日付)は、今回の総選挙結果について、DCが、その腐敗、汚職、縁故主義のゆえにイタリア国民の離反を招いたことを、当然とする見解を発表したのである。

同紙は、カトリック史家ジョルジョ・ルーミの筆になる「政党による市民社会に対する僭主支配の終焉」という論文を掲載した。そしてこの論文は、イタリアの「アンシャン・レジーム」を構成してきた古い政治階級は、政権交代による若返りを回避してきたために化石化し、その結果として崩壊したと、DCの一党優位政党システムを厳しく断罪したのである。そして「カトリック教徒の統一」についても、それ自体の価値は揺るがないとしても、「民主主義体制の中枢に巣くう寄生的階層」の利害によって歪曲されるようなものであってはならないとしていたのである。<sup>(8)</sup>

教会によるDC批判は、じつは、1991年11月にイタリア司教会議《正義と平和》委員会 (Commissione ecclesiale 《Giustizia e Pace》) が発表した『適法性を育む (Educare alla legalità)』という教書<sup>(9)</sup>において、すでにはっきりと表明されていた。

すなわち、「イタリアは、特権と諸制度の占拠や分割の兆しのもとにおかれた、法なき国 (paese senza legge) である」とし、「この国において法治意識 (senso della legalità) が育つか衰えるか」についての第一の責任は、政治に関与するカトリック教徒つまり DC の政治家にあるとしていた。そして DC の政治家は「政治とビジネスの不正な結びつき」を断ち切らねばならないとしていたのである。

さらに重要なことは、「不正との闘いは政党が独占すべきものではない。市民社会もその政治的機能を発揮すべきである。《政党》という制度を乗り越えることではなく、政治は政党のなかだけで行われるものではないことを認めることが必要なのである」と述べ、政党政治の限界を明確に指摘していたことであった。そして、「政治はもうこれ以上周縁的なものとなってはならない」とするとともに、「増大しつつある公共性の私化 (la crescente privatizzazione del pubblico)」を阻止しなければならないとして、政治の機能低下に対して深い憂慮を示していたのである。

このように教会も、DC の一党優位政党システムや政党支配体制にたいする批判の姿勢を強めていたのであり、「政治における道義性の回復」という91年6月の国民投票の課題は、まさに教会の共有するところのものでもあったのである。

いうまでもなく、これら二つの断片的なエピソードだけで断定することは不可能であるが、これまで述べてきたことも考えに入れるならば、過飽和状態に達したイタリアの一党優位政党システムは、いまやはっきりと剝離現象を示しつつあり、政党支配体制もその崩壊サイクルに入りはじめたといってもよいように思われるのである。

## 註

### はじめに

- (1)『朝日新聞』1992年4月3日付朝刊。
- (2)『朝日新聞』1992年4月7日付朝刊、および4月8日付朝刊;『アエラ』1992年4月21日号。
- (3)『週刊プレイボーイ』1991年3月12日号;『朝日新聞』1991年2月7日付朝刊;ピエトロ・イングラオ「イタリア共産党最後の大会にあたり」『世界』1991年6月号;有田芳生「イタリア共産党最後の大会」および後房雄「新党創設のクライマックスへ」『窓』第7号(1991年春)。
- (4)The New York Times, 9 April 1992.

### I イタリアの政党政治における地殻変動の徴候

- (1)一党優位政党システムについては、さしあたり拙稿「一党優位政党システム」西川知一編『比較政治の分析枠組』ミネルヴァ書房、1986年、pp.197-218を参照。
- (2)1983年総選挙については、拙稿「キリスト教民主党に未来はあるのか—1983年総選挙とイタリアの政治」『国際研究』(中部大学国際地域研究所)、第1号(1984年)、pp.61-65を参照。
- (3)Mario Caciagli, Il XVIII Congresso della DC. La fine del settennato di De Mita e l'affermazione del neodoroteismo, Raimond Catanzaro & Filippo Sabetti (eds.) *Politica in Italia. Edizione 90*, Il Mulino, Bologna, 1990, pp.145-161.
- (4)Renato Mannheimer (ed.), *La Lega Lombarda*, Feltrinelli, Milano, 1991, pp.13-33.

- (5) Mario Caciagli, La meridionalizzazione dell DC, *Religione e società*, anno V, vol.10 (luglio-dicembre 1990), pp.71-77.
- (6) Gianfranco Pasquino, Party Government in Italy, Richard S. Katz (ed.), *Party Governments: European and American Experiments*, Walter de Gruyter, Berlin, 1987, pp.202-206.
- (7) 拙稿「保守党のジレンマ—80年代のイタリア政治とキリスト教民主党」『国際研究』第5号(1988年6月), pp.42-46。
- (8) Tremors across Europe, *The Economist*, April 11th, 1992.

## II 1992年総選挙

- (1) もともとはドイツの極右政党の台頭について『シュピーゲル』誌で用いられた表現であった。これについては、高橋進「論壇時評4月(上)」『朝日新聞』1992年4月27日付夕刊を参照。
- (2) Eugenio Scalfari, Nomencratura licenziata, *La Repubblica*, 7 aprile 1992.
- (3) 一党優位政党の数量的規定については, Giovanni Sartori, *Parties and Party Systems*, Cambridge University Press, Cambridge, 1974, p.193.
- (4) agenda setting は本来一党優位政党の持つ重要な「利点」のひとつであった。拙稿「一党優位政党システム」前掲書, pp.202-203を参照。
- (5) Gianfranco Pasquino, Modernity and Reforms. The PSI between Political Entrepreneurs and Gamblers, *West European Politics*, vol.9, no.1 (1986), pp.120-141.
- (6) Spencer M. Di Scala, *Renewing Italian Socialism. Nenni to Craxi*, Oxford University Press, Oxford, 1988, pp.195-239; Peter Lange, La fine di un'era: il referendum sulla scala mobile, in Piergiorgio Corbetta & Robert Leonord, *Politica in Italia. Edizione 1986*, Il Mulino, Bologna, 1987, pp.127-150.
- (7) Marco Follini, *L'arcipelago democristiano*, Laterza, Bari, 1990, pp.105-143.
- (8) 社会党の《南部化》については, Franco Cazzola, Struttura e potere del partito socialista italiano, G. Pasquino (ed.), *Il sistema politico italiano*, Laterza, Bari, 1985, pp.172-180.
- (9) 後房雄『大転換』窓社, 1991年。
- (10) オッケットについては, さしあたり Salvatore D'Agata, *Achille Occhetto. Dalla falce alla quercia*, Editalia, Roma, 1990.
- (11) Macerie di Brescia, *La Repubblica*, 26 november 1991.

## III 「同盟(レガ)」現象

- (1) この記述は, 主として次のものに依拠した。Daniele Vimercati, *I lombardi alla nuova crociata*, Mursia, Milano, 1990.
- (2) *Ibid.*, pp.151-153に収録。
- (3) Cf. Vittorio Moio, *I nuovi razzismi*, Edizioni Associate, Roma, pp.17-48.
- (4) Gianfranco Pasquino, Meno partiti più lega, *Polis*, vol.3 (dicember 1991), 1990 pp.555-564.
- (5) 梶田孝道「ヨーロッパ西の統合・東の解体(上)」『世界』1991年11月号, pp.137-138.
- (6) Renato Mannheimer, *op. cit.*, pp.122-158.
- (7) G. Pasquino, Meno partiti più lega, *op. cit.*, p.560.

## むすびにかえて

- (1) 1991年度末の累積財政赤字は1450兆リラ(約160兆円)とGDPの規模を上回り, 92年度の赤字も160兆リラ(約17兆円)と見込まれている。そしてこのままでは累積赤字をGDPの60%以内に押える97年以降の欧州通貨・経済統合のための基準達成も危ういとされている。これについては『朝日新聞』1992年

4月5日付朝刊を参照。

- (2)多様な国民投票の提案については、*L'Espresso*, 20 ottobre 1991, DCの制度改革案については、*La Repubblica*, 8 giugno 1991, 左翼民主党の制度改革案については、*L'Espresso*, 23 giugno 1991, 大統領制にかんする世論動向については、*La Repubblica*, 1 agosto 1991を参照。
- (3)最近のマフィアについては、*La Repubblica*, 24 1992; 『朝日新聞』1992年5月31日付朝刊; 竹山『マフィア戦争』集英社, 1991年; Nicola Tranfaglia, *La mafia come metodo*, Laterza, Bari, 1991.
- (4)後房雄, 前掲書, p.163。
- (5)Gento ragioni per un Si, *L'Espresso*, 9 giugno 1991.
- (6)Credenti e vincenti, *L'Espresso*, 23 giugno 1991.
- (7)Eugenio Scalfari, Tentativo di scippo, *La Repubblica*, 11 giugno 1991.
- (8)Girogio Rumi, Tramonta la signoria dei partiti sulla società civile, *L'Osservatore romano*, 7 aprile 1992.
- (9)Commissione ecclesiale Giustizia e Pace, *Educare alla legalità*, EDB, Bologna, 1991.